

—臨床—

患者アンケートにみる予防歯科診療室での定期健康管理の成果

吉岡節子¹, 佐久間汐子², 宮崎秀夫³¹新潟大学医歯学総合病院診療支援部歯科衛生部門²新潟大学医歯学総合病院予防歯科診療室³新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔健康科学講座予防歯科学分野**Outcome of professional care in Preventive Dentistry Clinic assessed by administering a questionnaire to the patients**Setsuko Yoshioka¹, Shihoko Sakuma², Hideo Miyazaki³¹Dental Hygienist Division, Department of Clinical Technology, Niigata University Medical and Dental Hospital²Preventive Dentistry Clinic, Department of Oral Health Control, Niigata University Medical and Dental Hospital³Division of Preventive Dentistry, Department of Oral Health Science, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Niigata University

平成 20 年 3 月 24 日受付 3 月 31 日受理

Key words : 歯周疾患 (Periodontal disease), プロフェッショナル・ケア (Professional Care), セルフケア (Self Care), 歯牙喪失 (Tooth loss), 質問紙調査 (Questionnaire)

Abstract

The purpose of the survey is to assess the oral health attitude of 642 patients who regularly receive professional care for periodontal health control in the Preventive Dentistry Clinic, and also to evaluate the effectiveness of periodontal care. A questionnaire survey was carried out between July 1st and December 27, 2002. More than 75% of the subjects were older than 50 years of age and 60% continued regular visits for 10+ years. The questionnaire results indicated that about 50% of the subjects had a first visit on their own choice and 89% continued visiting clinic in order to maintain or improve their oral health. They wanted to feel their oral cavities refreshed and teeth cleaned after obtaining professional care. They realized that oral health instruction and professional care made behavioral changes in them toward increasing oral health interests and using dental floss and interdental brush. 80+ % hoped to continue receiving periodontal health care regularly. Subjects aged 60+ years had 3.95 missing teeth in average. While undergoing periodontal health control, 172 persons, who were all 40+ years of age, experienced tooth extraction. Logistic regression analysis showed that "having lost teeth at first visit" was variable attributed to additional tooth loss while undergoing periodontal control. In conclusion, higher motivation for health, satisfaction after care and self-confidence could be considered as factors that helped to continue their regular visits, and analytic results suggested that professional care in addition to improving their self-care might contribute to decrease the risk for tooth loss.

抄録

予防歯科診療室の定期受診者の意識および態度を把握するために、平成 14 年 7 月～12 月の受診者 642 名を対象に自己記入式のアンケートを行った。また、管理期間中の歯牙喪失を指標として定期管理の効果を評価した。

対象者の年齢構成は 75% 以上が 50 歳以上で、平均管理期間は 13.8 (SD : 9.5) 年、10 年以上の継続者が 60% 以上であった。アンケートから、対象者の半数が自らの意思で初受診し、89% が歯・歯肉の健康の保持増進のために受診することが示唆された。処置を受けた後は「爽快感、きれいな歯」など良好な感触を得ており、定期受診後は「口への関心の高まり」、「フロス、歯間ブラシの使用」が認識されていた。同年代と比べて口腔の状態は「悪い方だ」との回答は 13% と低かった。そして、定期受診は 8 割以上が「是非続けたい」と回答した。対象者の平均喪失歯数は、60 歳代 3.6 本、70 歳代 5.4 本、80 歳代 6.9 本であった。管理期間中の抜歯経験者は 172 名で全て 40 歳以上であった。

歯の喪失リスクに関して、初受診時の抜歯の既往が有意な説明変数であった。

定期受診の背景には、対象者の健康保持に対するモチベーションの高さとともに、受診後の満足感や健康状態に対する自信が推察された。長期間の定期管理は、セルフケアの充実と相まって歯の喪失リスク軽減に寄与していることが示唆された。

【緒 言】

成人期の歯周疾患の予防には、セルフケアとプロフェッショナル・ケアの連携が必要である。しかし、このような考えは、未だ社会に浸透しているとは言い難い。そこで、新潟大学医歯学総合病院予防歯科診療室でブラッシング指導など歯科保健指導、および、歯石除去、専門的機械的歯面清掃（PMTC）などの歯周疾患予防処置を定期的に受診されている患者様の定期受診についての考えおよび態度について把握するためにアンケート調査を実施した。また、管理期間中の歯の喪失を指標として定期管理の成果を評価した。以上の結果について報告する。

【対象および方法】

予防歯科診療室の歯周疾患定期予防管理を平成14年7月～12月に受診された患者様を対象に自己記入式のアンケートを実施した。アンケートの質問項目は、①当診療室初受診の理由②定期管理の受診理由③定期管理受診後の自覚的変化④処置後の感想⑤口腔の健康状態に関する同年代との主観的比較⑥管理期間中の抜歯経験⑦今後の継続に対する意向⑧歯磨き行動の変化⑨歯垢染め出し検査に対する感想、以上の9項目である。アンケートの記入は、当日の診療終了後に依頼した。回答は、期間中のすべての受診者から得られた。更に、当診療室の診療録より性別、初診年月、調査時点の年齢および来院回数、受診間隔、そして、初診時および調査時点の喪失歯数を受診者の情報として得た。

解析対象者は642名（男性212名、女性430名）で、調査期間中の定期受診案内葉書の送付者の90%に相当する。また、定期管理の歯周疾患予防に対する有効性を評価するために、年齢群（10歳刻み）別に調査時の平均喪失歯数、管理期間中の喪失歯の有無および平均喪失歯数を算出した。また、40歳以上を対象に、期間中の喪失歯数および喪失歯の有無をそれぞれ目的変数に、性別、調査時の年齢群、受診間隔、管理期間、初受診時の年齢群、初受診時における喪失歯の有無を説明変数に重回帰分析、ロジスティック回帰分析を行った。

【結 果】

1) 調査対象者の概容

対象者の調査時の年齢構成は、50歳代以上が75%以上を占め、同初受診時の年齢は30歳代から50歳代が68%を占めた。対象者の平均管理期間は13.8（SD:9.5）年であるが、30年以上定期管理を受けている人が32名、20～29年が168名、10～19年が188名で、10年以上の継続受診者が60%を超える。

2) アンケート

各質問の集計結果は以下のとおりである。質問①：初受診の理由については、「自分自身の希望、家族や知人の勧め」という自らの意思で受診した人が56%で、「他科からの紹介」の38.5%を超えていた（図1）。質問②：定期受診の理由については「歯・歯肉の健康を保持、増進したい」が89%で最も多かった（図2）。また、定期受診の間隔については、各受診間隔（3ヵ月以下・4ヵ月・6ヵ月・1年の4タイプ）で85%以上の人「丁度良い」と回答しており、「短すぎる」が25名、「長す

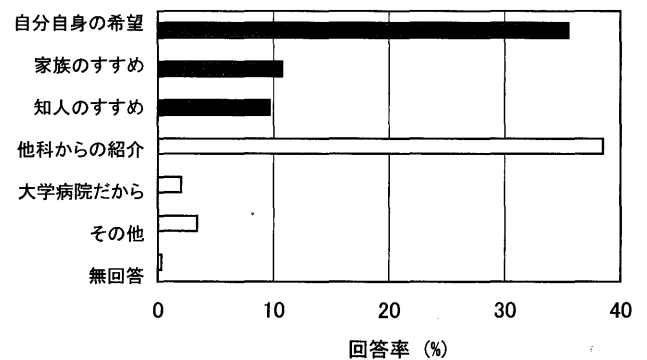


図1. 初めて受診された時の理由をお聞かせ下さい。

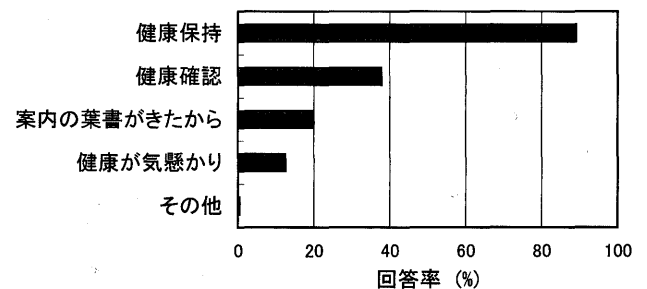


図2. 定期的に受診される理由をお聞かせ下さい。
(複数回答)

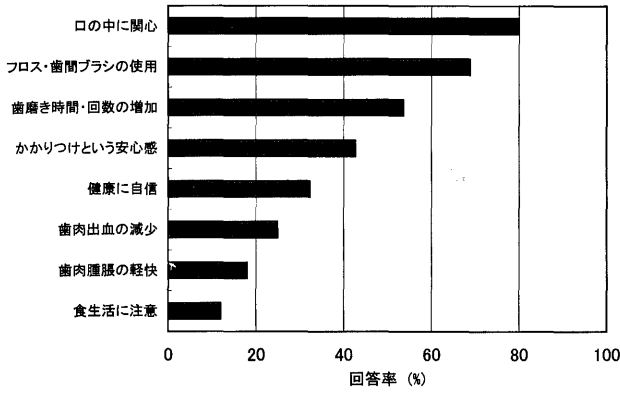


図3. 定期的に受診されるようになって、以前と変わられましたか。(複数回答)

ぎる」が16名、無回答が11名であった。質問③：定期受診後の自覚的变化については、「自分の口の中に関心を持つようになった」が80%で最も多く、次いで「フロス、歯間ブラシを使うようになった」であった(図3)。質問④：処置後の感想については、「爽快感が残る、歯がきれいになった」との回答が98%を占めたが、19名は「変化なし・痛みが残る・しみる・その他」と回答した。質問⑤：口腔の健康状態に関する同年代との主観的比較については、「よい方だと思う」46.9%、「ふつうだと思う」38.2%で、「悪い方だと思う」は13.2%と最も低かった。また、「よい方だと思う」と回答した人で、その理由(複数回答可)として「歯や歯肉が健康だ思う、むし歯が少ないと思う」と半数以上が回答した。一方、「悪い方だと思う」と回答した人の理由としても「歯や歯肉の状態が悪い」と60%以上の人が回答した。質問⑥：管理期間中の抜歯経験については、「抜歯していない」と回答した人は468名(72.9%)、「抜歯した」は154名(24.0%)であった。不明、無回答は20名(3.1%)と少なかった。質問⑦：定期受診の継続意思については、「是非続けたい」83%、「できるだけ続けたい」16%であった。

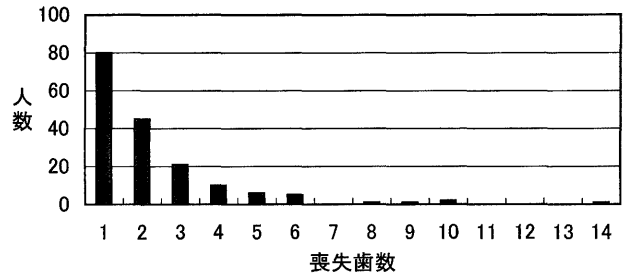


図4. 管理期間中の喪失歯数の度数分布 (n = 172名)

質問⑧：歯磨き行動の変化については、「歯磨きを丁寧にするようになった」：74%、「フロス、歯間ブラシを使用するようになった」：72%で、保健行動の改善は自認されていた。質問⑨の歯垢染め出し検査に対する意見については、「受けたくない」と回答した人は8名(1.3%)と少なかった。

3) 喪失歯数

調査対象者の年齢群別喪失歯数は、40歳代2.21本、50歳代2.33本、60歳代3.55本、70歳代5.43本、80歳代6.92本であった。

管理期間中の抜歯経験者は172名で、全て40歳代以上であり(40歳代以上の30.6%)、平均喪失歯数は2.23(SD:1.91)本であった。期間中の喪失歯数の度数分布を図4に示す。また、目的変数を管理期間中の喪失歯数とする重回帰分析の結果、有意な説明変数は、調査時の年齢群、初受診時の喪失歯の有無であった(表1)。また、期間中の喪失歯の有無を目的変数とするロジスティック回帰分析では、前述の2説明変数に受診間隔、管理期間を加えた4説明変数が有意であった(表2)。歯の喪失リスクは、「初診時既に喪失歯を所有している」、「年齢が高い」、「管理期間が長い」場合に、高くなることが示唆された。一方、「受診間隔が長い」場合に喪失リスクは低かった。

表1. 管理期間中の喪失歯数を目的変数とする重回帰分析(解析対象者：40歳以上の562名)

説明変数	カテゴリー	回帰係数	標準誤差	probability	95%信頼区間	
性別	男性：1, 女性：0	0.084	0.12	0.486	-0.152	0.319
調査時の年齢群	10歳代～80歳代の8段階	0.484	0.138	0.000	0.214	0.754
リコール間隔	≤3M, 4M-6M, 12M	-0.169	0.105	0.108	-0.374	0.037
管理期間	<2, 2-4, 5-9, 10-14, 15-19, 20-24, 25-29, 30≤の8段階	0.136	0.07	0.052	-0.001	0.274
初診時年齢群	10歳代～80歳代の8段階	-0.074	0.134	0.579	-0.338	0.189
初診時の喪失歯の有無	喪失歯なし：0, あり：1	0.383	0.127	0.003	0.135	0.632
定数		-2.350	0.435	0.000	-3.204	-1.495

Adj R²=0.1788 p<0.000

表2. 管理期間中の喪失歯の有無を目的変数とするロジスティック回帰分析(解析対象者: 40歳以上の562名)

説明変数	カテゴリー	オッズ比	標準誤差	probability	95%信頼区間	
性別	男性: 1, 女性: 0	0.874	0.188	0.531	0.572	1.333
調査時の年齢群	10歳代~80歳代の8段階	1.817	0.457	0.018	1.110	2.974
リコール間隔	≤ 3M, 4M-6M, 12M	0.680	0.126	0.037	0.473	0.977
管理期間	< 2, 2-4, 5-9, 10-14, 15-19, 20-24, 25-29, 30 ≤ の8段階	1.385	0.181	0.012	1.073	1.788
初診時年齢群	10歳代~80歳代の8段階	1.043	0.255	0.862	0.646	1.685
初診時の喪失歯の有無	喪失歯なし: 0, あり: 1	2.096	0.487	0.001	1.329	3.307

pseudo R²=0.1468 p < 0.000

【考 察】

調査期間は6ヵ月であった。調査対象者は、期間中の定期リコール対象者の9割に相当することから、当診療室のリコール応答率はかなり高い。当診療室では、診療後、次回来院案内の葉書に、患者様ご自身から、住所・氏名を書いていただいている。そして、未来院が2回続いた場合(一回は当診療室で案内葉書に宛名を記入)、案内を中止し管理は終了となる。したがって、対象者は、期間中2回続けて未来院がなかった患者様で、管理期間が長期に及ぶ患者様ほど受診に対するモチベーションはかなり高いといえよう。このように定期管理受診の継続を可能にする背景を本アンケート結果から推察することができた。

質問①当診療室初診の理由では、半数以上の対象者が他科からの紹介ではなく、自分の意志(家族・知人の薦めを含む)で受診しており、長期継続を可能にした一因と推察される。質問②, ③の回答から、定期的管理を受けることで口腔保健に対する意識が更に向上した人が多いことが窺える。質問④, ⑤, ⑦の回答からは当診療室の診療内容に満足感を得ていること、受診の継続を希望する人が多いこと、口腔の健康状態に自信がある人が半数近いことが示された。

対象者の喪失歯数は、全年齢群で県民調査¹⁾、全国調査^{2, 3)}に比較して1/3~1/4と少なく、高齢になるほど両調査との差が大きくなる。セルフケアとプロ

フェッショナル・ケアの適切な連携による成果であると考えられる。また、期間中の歯の喪失に関連を示した説明変数の内、「管理期間」では、長期になると喪失リスクが増大する傾向にあった。一般の人との比較では喪失歯数は少ないが、定期管理の継続下にあっても、管理期間の延長とともに、換言すると加齢とともに、歯の喪失を経験することを示唆した。また、「歯の喪失経験」が新たな歯の喪失に繋がるリスクが示唆された。「受診間隔」については、歯周状態が良好な人では長く設定されているので、間隔が短い場合に喪失のリスクが高い、という結果は道理であろう。

定期管理受診を促した背景として、対象者の健康保持に対するモチベーションの高さとともに、受診後の満足感や健康状態に対する自信(同世代との比較)が好循環となったことが推察された。長期間の定期管理は、セルフケアの充実と相まって歯の喪失リスク軽減に寄与していることが示唆された。

【文 献】

- 1) 平成11年第4回県民歯科疾患実態調査報告: ヘルシースマイル21(第三次新潟県歯科保健医療総合計画), 第3章 統計表, 表1-1(4)永久歯の状況, 34頁, 新潟県, 2001.
- 2) 平成11年度厚生労働省歯科疾患実態調査
- 3) 平成17年度厚生労働省歯科疾患実態調査